
トラック野郎に恋して…

大嶋正和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラック野郎に恋して：

【Nコード】

N9580J

【作者名】

大嶋正和

【あらすじ】

トラック運転手と売り出し中のミュージシャンの、あり得ない恋。読めば、あり得ない恋を試してみたくなるかも！？そして、二人は：

時間は、深夜二時になろうとしている。とある国道を東へ向かう一台の大型トラック。時速は約七十キロだ。

（あゝ、ひと昔前までは、もっと早く走れたけどなあ。）

運転しているのは、上杉宏。三十八歳。バツイチの独身。運転歴十三年の中堅。今日の行き先は東京の品川だ。彼は、そんなことを思いながら、エフエムの深夜放送をかけて、約二時間走らせたところで小休止しようと思い、コンビニに寄った。中に入ると、明け方にもかかわらず、若い女の子が本のコーナーで立ち読みしていた。他には、客はいない。彼は、タバコと缶コーヒーを買って、店を後にしてトラックへ戻ろうと歩きだしたら、立ち読みしていた女の子が声を掛けてきた。

「あの、すいません。どこまで行けますか？」

「えっ!？」

彼は、突然声を掛けられ顔中に「？」マークだらけだ。少しとまどいながらも答えた。

「ああ、東京の品川だけ……」

「ああゝ、良かったあゝ。やっと、東京に行く人が見つかったあ。お願いなんですけど乗せて貰えませんか？東京まで。」

それまで、緊張していた顔が笑顔になり、胸の前でお願いのポーズをして、聞いてきた。

「それは別に構わないけど、明日の朝になるけどいいかな？」

「全然オッケー！東京まで行ければいいから。」

彼女は、ニコニコしながら彼のトラックに乗り込んだ。（しかし、若い女の子がこんな時間にヒッチハイクか？）

彼は、そう思いながらまた、トラックを走らせ始めた。何かあると思いついてみた。

「どうしたの？まさか、家出とかじゃないよね!？」すると彼女は、

「違うよお。っていうか、私のこと分らない？」

「はああ??？」

「ホントに!? 最近良くテレビに出てるけどなあ」 「ゴメン。この仕事してると見ること少ないから。」 「そうかあ。じゃあ、名前を言えば分かるかな!? カスミで分かる!？」

そう言われて、信号待ちで停まったので、差し込む外灯の明かりで顔を見てみた。

「えっ! ウソ!? 本人? ホントに!？」

「そうだよお。何だあ、知ってるじゃん。」

彼女はニコニコしていた。半年くらい前から、新人ミュージシャンとしてテレビに出て、徐々に人気が始まって今ではかなり売れている。ビジュアルも良く、スタイルも悪くはない。今の服装は、Tシャツに革ジャン、ジーンズだ。髪は、伸ばせば胸の下まであると思うが、ポニーテールにしている。ラジオで、ツアーの最中と言ってたはずと思い聞いてみた。

「ツアー中じゃないの? 確か昨夜、どこかでやってたでしょ? それが何でヒッチハイクしてるわけ? それも、こんな時間に。」

「そうなんだけどね。デビューして初めての休みらしい休みだし、色々あって内緒で抜け出して来たんだ。だから、今頃は大騒ぎかもね。」

言いながらニコニコしている。

「大丈夫!? 後で、大問題じゃないの?」

「大丈夫よ。とりあえず今日は、完全に休みだからね。」

右手の親指を立てて、ニコニコしている。

「いや、まあ、大丈夫ならいいけどさあ。まあ、俺は可愛い女の子と東京まで、ドライブ出来るから嬉しいけどね。トラックなのがチヨットねえ。」

「平気、平気。トラックとか乗ることないし。ワクワクするよ。あつ、名前聞いてないけど、教えて?」

「ああ、宏だけど、みんなヒロって呼ぶから、ヒロでいいよ。」

「じゃあ、ヒロ！東京までレッツゴー！！」

笑顔で、手を突き上げていた。宏は、その可愛い笑顔を見ながら、とりあえず今の状況を楽しもうと思った。

斉藤行夫、三十三歳。カスミのマナージャーである。ライブ後にカスミが姿を消し、辺りを必死に探したが見つからず、携帯に何度も掛けるが電源が切られている。日付が変わろうとしている。

（ああ、もう、どうしたらいいんだよ、全く！）

そう思いながら、いまだに控え室のソファーに横になっている。不意に携帯がなり、飛び起きた。

「もし、もし！カスミか！？」

「何をそんなに勢い込んでるんだ？何かあったのか？」

行夫は、思わず画面の番号を確かめずに出ていた。しまった！と思ったが遅い。相手は、事務所の社長、遠藤晃一だった。彼は、昔のグループサウンド流行の時代のあるグループのメンバーだった男だ。

「いや、あの、特に何も…」

「そんなはずないだろ。何があった？言ってみろ。」「…実は、ライブ後にカスミが姿を消してしまっ…」

「何だと！？明後日は、ツアー最後の東京公演だぞ！早く捜し出せ！全く何を考えてるんだ、アイツわ！！」

「わかりました。それと、マスコミが何社か情報を得てます。申し訳ありません。」

「本当か！？分かった。マスコミの対応は、こっちでやる。とにかく早く捜し出せ！いいな！？」

電話を切った。しかし、足取りがつかめないまま時間が過ぎていくだけだった。社長の遠藤は、東京公演の簡単な打ち合わせをするために、掛けてきただけだった。なのに、この事態になっている。行夫が、怒鳴られるのは無理もない。ここ何年もこの事務所からは、スターが出ていないため、彼女に大きな期待をしているのである。人気も上がり、他人への人当たりも良く周囲の評判もいい。彼女が

コケれば、この事務所も終わるぐらい彼女が、この事務所を今は支えている。行夫は、何度も掛けるが電源が切られている。

宏は、エフエムを聞きながら、相変わらず街道を走らせていた。途中で拾った女の子、カスミちゃんは、小さな寝息を立てながらトラックの寝台で寝ている。宏が、寝間着代わりになっているジャージを着て。色々な話をしていたが、途中で眠たくなったらしく、貸してえと言って着替えて寝てしまった。彼女は、二十三歳。ストリートでやっていたところを、今の事務所の社長が声を掛けてきたらしい。夢にまで見たデビューだったが、その期待が大き過ぎてプレッシャーに押し潰されそうに最近はなっていたらしい。そのため、デビュー後の初めての休みを、今とは全く違う状況で過ごそうと思って、ライブ後に抜け出して来たらしい。無茶するなあと思ったが、気持ちはわからなくもない。昼過ぎに、カスミは目を覚ました。

「あゝ、良く寝たあ。ヒロ、おはよ。今、どの辺？」運転席と寝台の間のカーテンから、顔だけ出して言った。

「おはよ。今、名古屋の手前。それにしても、大きなイビキだったなあ。」

「えっ！？うそおー！！イビキかいてた！？」

「うん、ゴォー！って。」「マジで！？」

「ウソだよお。」

バシッ！と後頭部を叩かれた。何気ないやりとりが三十八歳の宏には嬉しい。久し振りに、ドキドキしている。

「ヒロ、ひどくない！？女の子にそんなこと言ったらダメよお。」少し膨れっ面で言う。そこがまた、可愛い。寝る前にメイクを落とし、スッピンだがナチュラルメイクらしく、あまり変わらない。

「ゴメン、ゴメン、それより何か食べる？」

「うん、食べる。お腹減ったあ。何がいいかなあ？」「あっ、レストランとか無理だからね。トラックじゃ入れないし、後、ドライブスルーもね。だから、コンビニか食堂になるけど…」「ああ、そう

よねえ。じゃあ、食堂がいいかなあ。コンビニ弁当は、ちょっとねえ。」

「オッケー！でも、カスミちゃん、入ってバレないかな？」

「大丈夫よ。スッピンだし、ヒロのジャージ着てるし。人違いですって言えばいいよ。それか、彼女ですって言うから。」

「えー！？彼女って：そりゃ彼女いないから、彼女なら嬉しいけどさあ。まあ、まずあり得ないけどねえ。」

「あはは、正直彼氏とかいないし、キープするなら今のうちだよ。」
「イタズラっぽい笑顔で言う。」

「おい、おい、おじさんをからかうなよ。」

「あははは、困ってる、困ってる。」

「じゃあ、メシ食うか。」宏は、街道沿いの食堂に入った。トラツク野郎御用達の食堂だ。十台ぐらい止まっている。宏は、トンカツ定食、カスミはオムライスを注文して、待っている間テレビを見ていた。幸いにも、カスミに気付くものがない。

「ちよっと、行方不明になったって言ってるよ。ホントに、大丈夫？」

昼のワイドショーで流れていたのだった。

「しーっ！黙って、黙って。後で連絡するから、大丈夫よ。怒られるだろうけどね。」

「当たり前じゃん。内緒で抜け出して来たんでしょ。」

「まあね。」

ペロツと下を出す。運ばれてきたオムライスを、カスミは美味しそうに食べ始めた。しばらく、それを見ていたらカスミが気付く、

「なあに？そんなに見ないで。ヒロも早く食べたら。」

「ゴメン、ゴメン、美味しそうに食べるから、思わず見てしまった。」

「恥ずかしいでしょ。バアカ」

別に怒ってはいなかった。逆に、照れたような笑みを浮かべていた。宏は、半分本気でこんな彼女がいたらいいなあど、思っていた。そ

の反面、とてもあり得ないことだとも分かっている。この年で、何かを期待するのは、野暮だろう。それに、住む世界があまりにも違いすぎる。彼女の気まぐれで、たまたま出会ったオジサンの一人にすぎない。宏は、東京に行く時のいい思い出が出来たと思っていた。そんなことを考えながら、カスミとトラックに戻った。

あり得ない出逢いかもしれないけど、立場を考えなければ、あり得るかも？

行夫は、街中を出来る限り捜して歩き回った。しかし、いくら地方都市といっても小さい街ではないので、カスミ本人どころか手掛かりさえもつかめずに、疲れ果ててホテルにいた。テレビからは、昼のワイドショーがカスミの事を言っている。社長の遠藤からは、何度も電話があった。明日のライブ前には、何事もなかったように現れるだろうと思うようになっていた。電話が鳴った。また、社長かと思いながら、

「もし、もし、斉藤ですが。」

「私、カスミです。」

「えっ！？ あっ、おい、何やってんだよお！ 何処にいたんだよ！？ 心配かけやがって！！」

「ごめんなさい。初めての休みだから、好きにしたいくて何も言わなかったの。場所は言えないけど、東京に向かってるから安心して。明日のライブに穴は開けないから。」

「当たり前だろ！ でも、ライブには間に合うなら一安心か。しかし、一言声掛けてからにしてくれよ。社長からは怒鳴られるし、カスミは見つからないし……まあ、良かった、無事で。社長には、言っておくから明日は、カスミから言うんだぞ。」

電話を切ると行夫は、疲れが一気に出て寝てしまいそうになり、慌てて社長に電話した。社長も、無事が分かって安心したのか、大目に見てくれそうだ。普通なら、クビ騒ぎになってもおかしくない。それだけ、期待が大きい表れだ。行夫は、いつのまにか寝てしまった。

「ねえ、ヒロお。高速道路は、使わないの？」

「ああ、必要以外はなるべく使わないよ。使っている金額が決まってるからね。それ以上使えば、給料から引かれるからね。高速使え

ば楽なんだけどねえ。」

「ふうん。大変じゃん。普通の道は渋滞するし。それに、お風呂とかどうするの？」

「まあね。風呂はガソリンスタンドとか、健康ランドみたいなところとかだね。」

「へえ。スタンドではいれるんだあ。」

「トラック運転手だけだね。」

「じゃあ、今日はどうするの？私と一緒にだけ…」

「そうだなあ、どうしようかなあ。どこか有ったかなあ？」

「入らないの？私、入りたいんだけどなあ。」

「どこが有ったかなあ…？」

「ねえ、ヒロお。あそこのお風呂は、ダメかな？」彼女が指を差した先の建物は、ラブホテルだった。

「いや、あそこはいくら何でも…」

「だから、お風呂入るだけだって。何にもしない約束だよ。モチロン！」

「当たり前だろ！そんな安売りする様なことしたら、ダメ！」

「良かったあ。ヒロがいい人で、安心したあ。」

胸に手を当てながら、彼女は言った。言われた宏は、苦笑いした。男は、そういう気持ちじゃなく無いわけじゃないから、いい人と言われて喜んでいいものか。だから、ホントに風呂に入っただけで、出て来た。

「後は、東京までゴー！！だね、ヒロお。」

「そうだなあ、今、沼津だから、時間的に途中で仮眠して、明日の朝六時頃に行くつもりだけど、いいかな？」

「ああ、そうよねえ。ずっと運転してるもんね。」

「あつ、カスミちゃんも寝台でいいからね。俺は、前で寝るから。」

「あつ、うん、ありがと。」

宏は、国道一号線から国道二四六に入り、秦野中井インターから東名高速に入り、海老名サービスエリアで仮眠することにした。食堂

を出る時に、彼女はマネージャーに電話をしていたが、大丈夫だろうか？大丈夫だよおと、言っていたが：「カスミちゃん、どこも行けなくて悪かったね。せっかくの休みだったのに、トラックでドライブしただけだったね。オジサンと。」宏は、苦笑いした。

「気にしないでいいよお。そんな時間もなかったし。いつも、新幹線や飛行機だから景色を楽しめなかったのが、楽しめていい気分転換になったよ。富士山も綺麗に見えたし。」

「それならいいけどさあ：でも、大丈夫？明日…」

「大丈夫だって。ヒロの事は誰にも言わないし。二人だけの秘密だから、ヒロも言っちゃダメだよお。」

「言わないよ。モチロン。俺も楽しかったよ。退屈しなくて良かった。」

とりあえず、二人は横になった。朝もまだ明け切らない、薄暗い時間だ。宏は、彼女を起こし走り始めた。

「おはよ、カスミちゃん。もうすぐ、バイバイだね。品川駅の近くでいいかな？何か、淋しいなあ。」

彼女は、カーテンを閉めた寝台で身仕度しながら、

「おはよ。いいよお、品川で。でも、ホントはもう少しヒロと一緒にいたいけどね。」

イタズラっぽく笑っている。

「またあ、そんなこと言って、からかう。」

「はは、困ってる、困ってる、面白〜い。」

彼女はニコニコしている。「今日、ツアーの最後でしょ。ガンバレよお。」

「うん、ありがと。ねえ、連絡してもいい？」

「ああ、いいよ。まあ、少しでも思い出して、気になった時は、連絡して。愚痴ぐらいは、聞けるかな。」宏は、少し笑みを浮かべて言った。

「分かった。ヒロもたまには、連絡してよね。」

「ああ。でも、カスミちゃんの方が分からないから、メールする

よ。」

「うん、分かった。じゃね、バイバイ。」

「うん、バイバイ。」

宏は、少し名残惜しかった。夢のような一日だったと思って、頬をつねった。痛い。夢じゃなかった。連絡先は、交換したから連絡出来るが、こっちは覚えていないけど、彼女の方が何日もしたら、忙しくて忘れるに決まってると思っていた。宏は、目的地に向かって改めてトラックを走らせた。

カスミの周囲

カスミは宏と別れた後、品川駅から電車で東京ドームへ向かっていた。今夜のツアー会場だ。車中で、カスミに気付く者はいなかった。スッピンだし、服装も目立たないし、サングラスも掛けていた。サングラスは、宏の物を持って来た。カスミは、ひとつ大きく息を吐いてから、ゆっくりと控え室のドアを開けた。中にいた人の視線が向く。

「カスミ!! 何やってたんだ!?! 心配したぞ!」

社長の遠藤が言った。

「ちよつと、自由になりたかったのよ!」

「それならそれで、マネージャーに一言言ってからにしろ! ファンには、ちゃんと説明しろよ! 分かったか!?! いいな!」

「分かってるわよ!!」

遠藤は、カスミの返事を聞くか聞かないかの内に出て行った。ライブは、予定通り始まり無事に終わった。ただ、カスミが行方不明になったことの説明と謝罪を除いては。

「カスミ。休みが欲しい時には言ってくれ。スケジュールの調整するから。社長とも話したんだが、無理をさせてきたからなるべく、カスミに合わせる様にするから。」

行夫が言った。

「分かった。そうしてくれるなら、言うわよ。」

「ああ。ところで、どうやって東京まで戻って来たんだ?」

「別にいいじゃない。無事に帰って来たんだから。」「まあ、それはそうなんだけど…」

「何!?! 何か文句あるの? あとさあ、着替えとかしたいから出てくれない?」

「あつ、ゴメン。じゃあ、明日は朝十時に迎えに行くから。お疲れ。」

「はあい、お疲れ」

カスミは、仕事が終わった後ぐらいは、好きにしたいくて送って貰っていない。電車とかで帰っている。ドームを後にしようとした時、携帯が鳴った。

「もしもし。」

「カスミ、ライブお疲れ！今からどう？昨日のこととか色々聞きたいこともあるしい。」

電話の相手は、高校時代からの友達で、今は同じ業界で仕事をしている、相原美咲だった。あるグループのボーカルだ。

「んー、明日十時だからなあ。一時間くらいならいいよ。でも、聞きたいことって何？」

「まあ、それは会ってからということ。じゃあ、後でね。」待ち合わせのいつものバーにカスミが行くと、美咲はすでに来ていた。手招きしている。

「よっ。久しぶりだね、カスミ。」

「うん、久しぶり。美咲も元気そうね。」

「まあね。元気だよ。」

「で、何が聞きたいの？」「何って、昨日、何してたのよ？行方不明になってたって、どういうことよ？」「そのことね。休みだったから、内緒で一人で温泉に行ってたのよ。デビューして初めての休みだったからさ。」

「あんたねえ、新人がやることじゃないわよ。普通なら、クビよお。私も心配になって、何度も電話したけどつながらないしさあ。」「ゴメン、ゴメン」

「ホントに、一人で行ったの？それとも、素敵な出逢いがあったとか？」

「はあ！？何言ってるの？一人で行ったし、そんな出逢いがあるわけないでしょ。平日の昼間にさ。」

「やっぱり、そうだよねえ。」

カスミは、昨日一日乗せて貰ったヒロのことを思い出していた。

二人が再会！？そして：

宏は、カスミを拾って東京に行ってから、約一ヶ月ぶりに品川へ向かって、トラックを走らせていた。東京が近付くにつれて、カスミのことを思い出していた。彼女は、あの時の騒ぎが影響していない様で、テレビやラジオに出ていた。デビューして初のアルバムを製作中らしい。カスミの方から連絡は、一度もないし、勿論、宏の方からもしていない。たまたま、拾って乗せたのが、自分なだけであっただけと、思っていたからだ。それに、忘れていると思っていたからだ。夢か幻だったのだろうと、改めて宏は思っていた。ふいに、携帯が鳴った。時間は、夜中の一時を少し回ったところだった。宏は、運転中だったため、番号を見ずに出てしまい、少し緊張しながら言った。

「もし、もし。」

「ヒロお。誰かわかるかなあ？」

「えっ！？」

「えっ、じゃないでしょう。忘れたの？カスミだよお。」

「ウソ！？ホントに！？」「ホントだよお。で、何してるの？」

「何って、運転中だけど：品川に向かってる：どうしたの？」

「東京に来るんだあ。ヤッター！実はさあ、明日、一ヶ月ぶりに休みくれたんだけどさあ、予定が何もなくて何しようかと思ってたんだよね。それで、ヒロのことを思い出して、何してるかと思って、電話してみたんだけどね。迷惑だった？」

「いや、迷惑なわけではないし。むしろ、嬉しいし、ビックリだよ。こんなオジサン、覚えてくれてて。」

「大丈夫。オジサンじゃないよ。で、明日少し時間作れないかなあ？」

「いや、まあ、帰りの荷物が泊まって次の日だから、荷物を降ろしたら、大丈夫だけど。」

「じゃあ、決まりだね。品川の何処に行くの？」

「ああ、品川埠頭だけど、何で？」

「だったら、明日十時に行くからね。品川埠頭の交番の近くで待ってるから。」「ええ！？ ホントかよお。大丈夫？ フライダーとかされたら、どうするの？」

「大丈夫だって。心配ないって。」「ホントかよお…」

「ホントだって。もし、その時は、彼氏です！ って、言うからさ。」
「…」

「こらっ！ ヒロお！ 黙るなあ！」

「いや、だって、返事に困るでしょ！？」

「まあ、とにかく明日十時に行くからね。埠頭の交番の近くで、待ってるから。じゃあ、おやすみい。気を付けてね。」

「ああ、おやすみ。」

宏は、突然のカスミからの電話で、眠気も吹っ飛んでしまった。宏の方は、勿論忘れていないが、カスミの方も覚えていてくれたことに、嬉しくて一人でニヤニヤしていた。しかも、偶然ではなく、約束して会えるのだ。宏は、ハンドルを握りながらまだ、ニヤニヤしていた。

宏は、仕事を終わらせてから、待ち合わせ場所へ向かった。向かいながら、からかわれてないか、夢じゃないかと、あれこれ考えていた。宏は、わざと五分ほど遅れて行った。信じられないでいたからだった。カスミは、来ていた。宏が近付くと、

「ヒロ！ 遅いぞ！！ 女の子を待たすなあ！」

「ゴメン、ゴメン。待ったかな？ いつ来た？」

「約束の十分前。」

カスミは、言いながら膨れっ面のままだ。わざと、膨れっ面をしている。その証拠に、口元は笑っている。宏が分かりやすい様に、乗せて貰った時と同じ服装だった。宏のサングラスをして。

「早かったね。」

「そうかな。普通だよ。だって、ヒロに早く会いたかったからさ。」
「嬉しいこと言うねえ。本気にするだろ、このオジサン。」

「ヒロお、自分で思ってるほどオジサンじゃないよ。全然、私のストライクゾーンだよ。」

「ホントかよお!？」

「ホントだってば。だから、会いたいと思って連絡したんじゃない。ヒロは、連絡してくれないしさあ。正直、あれからヒロのこと度々、思い出してたから顔が見たくなったのよ。」

「そりゃ、嬉しいなあ。ありがと。こっちから、連絡するのは、さすがにためらってね…」

「そっか。それより、今日は何時までいいの？色々、行きたい所があるんだけど…」

「明日の朝、横浜に行けばいいから、遅くまで大丈夫だけど…カスミちゃんも、大丈夫なの？」

「ヤッター!!じゃあ、引っ張り回そう!私は、大丈夫だから。」
カスミは、とびきりの笑顔になり、宏の腕を組んで引っ張る様にして、歩き始めた。

「おい、おい、大丈夫かよ？」

「平気、平気、ほら早く行くよ!」

渋谷、六本木、青山、新宿を、カスミに引っ張られる様に歩いたが、宏は、恋人同士みたいだなあと、思っていた。品川に帰る途中で、適当なレストランに入った。宏は、それなりの所に入ろうと思って、いたが、カスミが、気取らない店でいいからと言って、カスミから入って行った。

「しかし、信じられないなあ。あのカスミちゃんが、目の前にいるこの状況は、有り得んな。」

「そう?別に気にしなくていいんじゃない。私、普通の女の子だよ。」

「そりゃ、そうだけど周りは、そうみないからなあ。」

「まあね。でも、普通の女の子ですう。」

カスミは言いながら、ニコニコしている。欲しかった物が買えたから、機嫌がいい。

「ねえ、ヒロお。これからどうするの？トラックで寝るの？」

「そうだな。トラックしか寝床がないからね。今、何時かな？」

宏は、時計を見ながら言った。

「ヒロお。あのさ、まだ大丈夫なら、もう一ヶ所行きたい所があるんだけど…付き合ってくれないかなあ。」

「えっ！？まだ、どこか行くの？」

「うん。」

カスミは言いながら、ニコツと笑った。宏は、カスミの勢いに押されて品川のシティホテルにいた。カスミは、シャワーを浴びている。宏は、嬉しい反面戸惑っていた。なにせ、一回り以上年下の女の子でしかも今、大人気の女の子だ。世間に知れたら、大変な事になる。大丈夫だろうか？宏は、あれこれ考えていた。カスミが、バスタオル一枚で出て来た。

「ヒロお、いいよお。シャワー。」

ニコニコしている。

「おい、おい。カスミちゃん、何か着たら？男がいるのに…」

「いいじゃない。まだ、着る気がないし、厚いからさ。」

イタズラっぽく笑っている。

「そんな困らせるような事言って…とりあえず、シャワー浴びてくるから、何か着てなよ。」

「はあい。」

カスミは、ペロツと舌を出した。宏は、シャワーを浴びてバスタオルを羽織り、部屋に入るとカスミはまだ、バスタオル一枚でいた。

「何やってんの！？風邪ひくよお、カスミちゃん。」「大丈夫だつてば。エアコンの温度調節してあるし。それに、身体が冷えたらヒロに暖めて貰うから。」

そう言いながら、ソファから立ち上がり、ベッドの端に座ってから、宏を見た。その顔は、オトナの女の表情になっていた。「あのさ、

私、今日一日ヒロとデートしてわかったんだけどさ、ヒロの好きだよ、やっぱり：だから、勇気を出して私の方から、ホテルに誘ったんだけど：ヒロ、私じゃダメかな？」カスミは、そう言ってるみたいだ。

「いや、ダメじゃないよ。俺がお願いしたいぐらいだよ。けどさあ、ホントに俺でいいのかな？」

「もちろん、いいよ。私を、ヒロの彼女にしてくれる？」

カスミは、宏を見ながら言った。宏は、カスミの様に座り言った。「もちろん。俺の方こそよろしくね。」

宏は、カスミを見て微笑みながら言った。そして、軽く口づけをした。二人は、ベッドに入った。宏は、年下の女の子を抱くことに、年甲斐もなくドキドキしていた。

「ヒロお、ドキドキしてない？」

「うん、してる。分かった？」

「うん：」

宏の胸の上で、言った。二人は、その夜初めて一つになった。

宏は、横浜に向かうため、早めに起きタバコを吹かしながら、コーヒーを飲んでいた。昨夜のことを思い出しながら。

「ヒロお、もう行くの？」

「あつ、起こした？ゴメンね。そろそろ用意して、向かわないとね。」

宏は、着替えながら言った。

「ねえ、ヒロお。私の彼氏だからね。」

カスミは、ベッドの中から顔だけ出して言った。

「ああ、俺の彼女だ。」

宏は、微笑みながら言った。カスミは、ニコニコしていた。宏は、カスミのところに行き唇を合わせた。

「じゃあ、そろそろ行くから。」

「うん。気を付けてね。ヒロお。」

宏は、まだ暗い朝の中仕事に向かった。

カスミは、宏が出て行った後、昨夜のことを思い出しながら、幸せな気分浸っていた。宏のことを更に、好きになっていた。優しく、女の子に気配りも忘れない。それに、今までの男は色々聞いて来たが、宏は聞いて来なかった。カスミは、今までの男がそうだったため、宏に昨夜聞いてみた。

「ねえ、ヒロお。昔のこととか聞かないね？」

「えっ！？ああ、別に過去は、過去だから気にしないけど…誰しも、言いたくないこともあるだろうし、聞いたところで過去だからね。」
「そっか。」

「そうだよ。昔のことは、話したい時に話せばいいんじゃない。まあ、人並みの人生経験はあると思うから、少々のことでは驚かないけど。それに、今、目の前にいるカスミちゃんが…好きなんだけど…ダメかな？」

宏は、最後の方は小声になっていたので、聞き取れていないだろうと思っていた。

「えっ！？私が何？」

カスミは、わざと聞こえない振りをした。そんな事を思い返しながら、身支度をしてホテルを後にした。宏のサングラスをかけて。

二人の仲に波風を周囲が起こして…

宏と会ってから二日後、カスミが事務所へ行くと、社長の遠藤に呼ばれた。

「何ですか？社長。」

「何ですか？じゃないだろう！何だ、これは！？どういうことだ！？」

遠藤が机の上に投げつけたのは、今週発売の写真週刊誌だった。そこには、品川のレストランで、宏と食事をしている時のものが載っていた。

「あっ！やっぱり、やられたか…」

「やっぱりじゃないだろう！カスミ！どういうことだ！？誰なんだ、この男は！？説明しろ！？」

「…」

「何故、黙ってる！？説明しろ！」

「…私の今一番大切な人、としか言えません。」

「…あんな、カスミ。それじゃ説明になってないだろ？誰なんだ？業界の人間なのか？」

「いえ、違います。一般の人です。」

「…そうか。いいか、カスミ。今が大切な時なんだぞ。人気も出始めて、クリーンなイメージできてるんだぞ。」

「それが、どうしたんですか？私も、一人の女です。恋愛も人並みにする。不倫とかしてる訳じゃないんだから、文句を言われる筋合いは、ないと思いますけど…」

「そういう事を言ってるんじゃない！今の自分の立場と状況を、少しは考えて行動しろ！って、言ってるんだ！」

「じゃあ、恋愛するなって言うの！？」

「はっきり言えば、そういう事だ。…別れろ。」

「いや。別れない。」

「別れろ。」

「別れない。」

二人は、三十分近く押し問答していたが、カスミの仕事に向かう時間が来たため、結局、結論は出なかった。カスミは、事務所を出るとすぐに、宏に電話した。

「もし、もし。」

「あつ、ヒロお。カスミだけど：今、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。どうしたあ？カスミちゃん。」

「ヒロお、ゴメン！この前レストランで食事した時に、写真撮られてた。次の発売の写真週刊誌に載るみたい：」

「えっ！？ホントに！？やっぱり、撮られてたかあ：」

「ホント、ゴメン！社長には、ヒロのこと詳しく言わなかったから。ヒロのことが、知られることは絶対に無いから安心して。」「こっ

ちは、大丈夫だけど、カスミちゃんの方は、大丈夫じゃないだろ？」

「まあね。さっきも社長と言いいいしてた。別れろって言うから、別れないって言ってやった。」

「おい、おい、大丈夫かあ？ホントに：」

「大丈夫だって。ヒロお、ホント、ゴメンね。」

「いや、俺の方は大丈夫だから、気にしなくていいから。」

「うん：ねえ、ヒロお。マスコミに聞かれた時には、はっきり言ってもいいかな？ヒロとのこと：」

「：それは、カスミちゃんにまかせるよ。」

「：うん、分かった。」

「また、何かあったら連絡して。」「分かった。連絡するね。」

カスミは、電話を切ると、ファーストアルバムのピーアールのため、ラジオ局に向かった。そこで、待ち構えていたのは、案の定記者やレポーター達だった。矢継ぎ早に、質問を浴びせられたが、唯一答えたのは、「お付き合っているのは事実です。今の私にとって、一番大切な人です。」

と、はっきり力強く言った。

写真週刊誌の発売当日の夜、幼なじみのミサキといつものバーのカウンターにいた。ミサキが呼び出したのだった。「私、ビックリしたわよ、カスミ。写真を見た時もだけど、テレビを見た時は、もっと驚いたわ。あんたから、何も聞いてなかったからさあ。あれだけはつきり言って、大丈夫?」

「大丈夫じゃないよ。今朝も社長と言いつけ合したから。」

「別れろって言われたんでしょ。」

「…うん。」

「でも、カスミは別れたくないって。」

「何がダメなの? 私も普通の女の子だよ。恋愛ぐらいするわよ。不倫とか略奪愛じゃないのよ。」

「まあ、そりゃそうなんだけどね。」「けど、何?」

「今、どんな男だろうと近付いたくないわけよ、社長は。それを許してもしものことがあつたら、会社が危なくなるからね。」

「もしものこと? 何、それ?」

「わからない? カスミ。写真を撮られるのは勿論だけど、子供とか出来たらどうするのよ。デビューして今までクリーンなイメージで来てるんだからさ。それが、崩れるのが恐いのよ。それに、子供が出来ればあんたのことだから、産むって言うだろうしね。」

「何言ってるのよ。そんな事全然考えてないわよ。今はただ、好きになった彼を失いたくないのよ。それが、心の支えなの。彼がいるから、何とかなるって思えるの。でないと、プレッシャーに押しつぶされそうよ。」

「プレッシャーは、感じてるんだ。」

「当たり前じゃない。私がダメになれば事務所もダメになるとか、しょっちゅう言われるんだから。」

「そんなに!?! まあ、私はカスミの味方だから、何かあつたら連絡してよ。」

「うん、わかった。ありがと、ミサキ。」

「長い付き合いじゃない、力になれるならなるからさ。で、どんな

感じの男なのよ？」

「えっ。んー、そうだなあ：やっぱり、話すのやめた。ミサキ、ワイドショー好きのおばさん顔になってるわよ。」

「誰がオバサンだって、カスミ！」

ミサキがカスミの腕を軽く叩いた。

「痛いわね。もう少し、騒ぎが収まったら紹介するからさ。」

「わかったわよ。絶対だぞ、カスミ。」

「わかったって。」

二人は、その後しばらくお互いの仕事の事や、昔話に花を咲かせた。

宏の周囲

社長の遠藤は、カスミと言い合いした日の夜、これからの事を考えていた。カスミに別れる気持ちがないとなると、男の方を説得して手を引かせるしかない、思っていた。しかし、ただ説得しただけでは、無理だろうから、カネを用意することにした。後で、男は一般人で年収も普通だと分かったので、五百万用意した。時間は、日付が変わろうとしている。宏は、久し振りに飲みに行った。飲める方ではないのだが、雰囲気が好きだ。

「いらっしやいませ！」

入り口のドアを開けると同時ぐらいに声がする。

「よう！」

宏は、軽く手を上げて言った。

「あらっ、珍しい人が来たわね。」

「悪かったな、珍しくて。」

店には客がボックス席に三人いて、店の女の子が一人相手をしている。ボックス席といっても、一つしかなく、後はカウンターに八人が座れる程の広さだ。ここのママは、宏の中学の同級生だ。名前は、山崎香。

「ヒマそうだな。」

「何言ってるの。ヒロほどヒマじゃないわよ。」

「バカ、忙しいんだって、俺だって。」

「そう？女の子と遊ぶのが忙しいのかな？はい、お待たせ。」

「サンキュー。まあ、仕事が忙しいんだよ。人をプレイボーイみたいに言うな。」

香はニヤニヤしている。

「何だよ。おまえこそ、彼氏が出来たのか？そろそろ見付けて収まった方がいいんじゃないの？」

「余計なお世話ですう〜！」

香は、ベエ―をした。

久し振りに飲みに来て、香と色々話をしていた。すると香が、

「あつ、そうそう。ヒロさあ、カスミっていうアーティスト知ってる？」

知ってるも何も、一晩中一緒にいたよと思いながら、答えた。

「ああ、知ってるよ。ラジオで良く流れてるしな。人気あるみたいだな。」

「へえ、ヒロでも知ってたなあ。かなり人気出てきて、人気上昇中よ。」

「へえ、そうなんだ。ラジオで良く流れてるけど、今流行りなんだぐらいにしか、思わなかったな。でも、何でカオリがそんな事気にしてんだ？」

「いやね、デビューした時にたまたまテレビで見た時に、彼女の曲が良くてファンになったのよ。」

「ふうん。で、彼女がどうかしたのか？」

「それがさ、今日テレビで見たんだけど、彼氏がいたのがバレたらしいのよ。まあ、彼女可愛いから彼氏がいてもおかしくないんだけどさ。で、彼女、記者達にはつきり言ったのよ、大事な人って。あんなに、はつきり言う新人も珍しいわよね。そう思わない、ヒロ。」

「ん、そうだなあ…」

「何よ、今、何か別の事考えてたでしょ？」

「いや、別に、何も…」

宏は、カスミのことを考えていた為、中途半端な返事になって香に突っ込まれた。

「まあ、いいわ。どうせ、どこかの女の子のこと考えてたんでしょ。」

「

「違うよ、ばあか。」

「でも、どんな男だろうね。イケメンだろうね、ねえ、ヒロ。」

「そうだなあ、イケメンだろうな。」

宏は、言いながら、俺のことだよと思っていた。幸いにも、公表さ

れなかったし、写真にも顔はモザイクがかかって分からなかった。服は、あの日カスミが宏のためにコーディネートして買った服だった。宏を知っている人間が見ても、初めて見る服だから、分からない。現に、香も気付いていない。「いいなあ、イケメンの彼氏。」
「そんなもんかあ。別にイケメンじゃなくても、良くないか？」
「何言ってるのよ。ヒロだって、彼女は可愛い方がいいんじゃないの？」

「まあ、そりゃそうなんだけどね。」

「でしょ。それと同じよ。」

「まあ、イケメンじゃない俺には、関係ない話だな。」

「けど、ヒロみたいにイケメンじゃなくても、いい男はいるからね。」

「どうせイケメンじゃないよ、俺は。」

「そうじゃなくて、見た目じゃなくて、それ以外がいい男なのよ、ヒロは。」

「何だよ、それ？わけわからんな。」

「簡単に言えば、スルメよ。」

「何だよ、噛めば噛むほど味が出るってか？」

「そつ。付き合っていくほどに、ヒロの良さが分かるのよ。」

「ふうん…自分じゃわかんないからな。」「分かんなくて、いいのよ。ヒロは今のままで。」

「そうかあ？」

「そうよ。あつ、そうそう、今度休みがある時に買い物付き合ってくれない？ヒロ。」

「はあ！？何で俺だよ？友達と行けばいいだろ？」

「ヒロも友達じゃない。それに、荷物が多くなりそうだから、男の人がいないとダメなのよ。」

「だから、俺以外にいるだろ？」

「いることは、いるんだけどさ、みんな下心見え見えで…」

「じゃあ、俺は下心が無いってか？」

「そつ。長い付き合いだけど、そんな事一度もないし。何より安心だからね、ヒロは。」

「そんな事、分かんないだろ？」

「大丈夫よ。っていうか、私もだけど、ヒロもそんな目で見たことないでしょ？」

「まあな。まあ、安全パイなわけだ。俺は。」

「そつ。だから、お願い！付き合って！」

香は、体の前で、お願いっていうように、手を合わせている。

「分かったよ。付き合うよ。けど、休みがいつか分かんないけど、いいのか？急ぎじゃないのか？」

「大丈夫。ヒロの休みに合わせるから。」

「そうか。じゃあ、休みの前に電話するわ。」

「ありがと。助かるわあ、ヒロ。」宏は、香や店の女の子と世間話を、ひとしきりして帰った。帰って、寝ようと思っていたら、電話が鳴った。知らない番号だったが、宏はためらいながらも、電話に出た。

「もし、もし。」

「夜分遅くすいません。上杉さんですか？」

「そうですが、あなたは？」

「失礼しました。私、カスミの事務所の社長の遠藤といいます。お話したい事があって、お電話差し上げたのですが。」

「そうですか。で、話しというのは？」

「はい、電話では長くなると思いますので、直接お伺いしてお話したいのですが、ご都合の方はいかがですか？勿論、上杉さんの予定に合わせますので。」

「急にそう言われても…休みの日はつきり分かりませんが…」

「分かるのは、いつぐらいですか？その頃、もう一度お電話いたしますが？」

「そうですね、二、三日中には分かると思いますけどね。」

「そうですか、分かりました。その頃に、もう一度お電話させて頂

きますので、よろしく願います。夜分遅くに、失礼しました。」

「はい、分かりました。では、失礼します。」

宏は、電話を握りしめたまま、考えていた。どうせ、別れてくれという話だろう。宏は、まだ付き合っているという感じではないが、カスミのことは好きだ。自分のことを大切な人と、言ってくれたカスミの気持ちには、応えなければと思うが、なにぶん、住む世界が違うため、戸惑いが無いわけではない。自分の気持ちに正直になればいいのだろうが、この年になるとやっぱり色々考えてしまう。宏は、寝られずにしばらく考えていた。宏は、電話を受けてから二日後に、遠藤に電話した。四日後の土曜日の午後一時に会えると。

遠藤は、カスミには内緒で昼前の飛行機に乗った。今日までの考える事といったら、カスミの問題だけだった。カスミの方は、全く今のところ別れる気がない。そのため、男の方を説得して別れさせようと思うが、それが上手いかなければ、強行手段に出るしかない。飛行機に乗っている間もあれこれ考えていた。

宏は、昼前に空港ターミナルの喫茶店に入り、軽い食事をして、遠藤を待っていた。食後のコーヒーと一服しながら。時間が一時を回った頃、飛行機が降り立った。すると、しばらくするとロビーに人が押し寄せ、その中の一人が宏のいる喫茶店に歩み寄って来た。それなりに身長があり、体格も少しがっちりしている。紺色のダブルのスーツにサングラス、ネクタイはしていない。店に入ると、辺りを見渡していたため、宏は軽く手を挙げた。男はそれに気づき近付いて来た。

「上杉さんですか？」

「そうですか。」

「はじめまして。私、カスミの事務所の社長をしている、遠藤といいます。」

言いながら、名刺を差し出した。宏は、それを受け取りながら、座るように促した。遠藤は、コーヒーを注文した。

「で、話というのは？」

「その事なんですが、カスミと付き合っているのは、確かですか？」

「そうですね、まだ日は浅いですが…」

「そうですか…」

「で、どうしろと？別れて欲しいと？」

「まあ、はっきり言ってそうです。今、カスミにとってもうちの事務所にとっても、大切な時期なんです。そんな時に、この状況はカスミにとってもマイナスイメージになるんです。ですから、別れて

頂けませんか？」

「…カスミは何て言ってるんですか？本人の気持ちを無視して、こんな画策をすれば事務所に対して不信感を抱くんじゃないですか？それに、一昔前と違って本人に実力があれば、プライベートは関係なしに人気は出ると思いますけどね。」

「ということは、上杉さんは別れないということですね？」

「簡単に言えば、そうですね。」

「…そうですか。」

「一人の女の子が、普通に恋してるだけですよ。その恋路を邪魔する権利はないと思いますがね。」

「それは、分かっています。ですが、今の時期は…人氣が安定しているならともかく、これからっていう時ですからね。」

「しかし、本人に別れる気がないなら、諦めた方がいいと思いますかね。」

「…困りましたね。」

「いや、困る事はないと思いますが…」

遠藤は、宏の言葉を聞きながら、封筒をテーブルの上に差し出した。

「…何ですか？これは…？」

「…これで、無かった事にして頂けませんか？お願いします！」

遠藤は、テーブルに頭をつけ言った。宏は、それを見ながら、呆れたように言った。

「…あんだ、最低だな。こんなやり方で、別れさせたとしても、カスミの気持ちは、どうなる？ショックで、曲が作れなくなれば事務所も危ないんじゃないんですか？それに、カスミが業界を辞めるって言ったら、どうするつもりですか？色々考えてこんな真似してるんですか？話になりませんね…」

宏は、自分の立場や事務所の事を優先的に考えている遠藤に腹が立って、思わず乱暴にタバコに火を付けた。

「そこを何とか、考えて頂けませんか？」

「…これ以上は、時間の無駄のようですね。失礼します。」

宏は、タバコを灰皿に押し付けながら言って、足早に店を後にした。遠藤は、改めて封筒をバッグにしまい、窓越しにロビーに目をやり、大きくため息をついた。遠藤は、その日の夜に強行手段に出た。カスミの携帯を取り上げ、マネージャーも女性マネージャーにし、外部との連絡を簡単に取れなくしたのである。要するに、二十四時間監視下においたのだった。

カスミは、遠藤と事務所でかなり激しくやり合ったが、どうにもならなかった。部屋に戻ってからは、遠藤のあまりの行動と不信感や、宏と簡単に連絡が取れなくなったことで、悔しさや切なさで朝までベッドの中で泣いた。

騒ぎから二カ月が過ぎた。宏は、いつもと変わらず日本中を走り回っていた。ただ、この二ヶ月カスミからも遠藤からも、連絡は一度もない。カスミは、ファーストアルバムを出したあと、サードシングルを出す予定になっていたのだが、まだ発売されていない。宏は、心配で仕方がないが二ヶ月の間連絡がないところをみると、相手の状況が良くないことは察しがつく。それを、知る術がない為困り果てていた。落ち着かない宏だったが、今日は香との約束があり、香といた。

「ああ、勘弁してくれよ。何だよ、これ？」

「ゴメン！少し店の模様替えしたくてさあ。」

かなりの買い物した量をクルマに積みされた。

「ガソリン代と食事ぐらいは奢るわよ、ちゃんと！」

「当たり前だ！タダでこんなことに付き合わされたら、かなわねえよ。今日だけにしてくれよ。」

「そんなに、文句言わなくてもいいでしょ！？早く終わらせるわよ。」

「へえ、へえ、わかりました。」

クルマを出し、香の店に向かった。とりあえず、荷物を店の中に入れ、食事をしに行った。

「今日は、ありがとね、ヒロ。助かったわ。」

香は、ニコニコしている。ハンバーグを食べながら。

「本当、今日だけだぞ。俺はてつきり、服とかの買い物に付き合わされるかと思ってたからな。」

宏は、ステーキ定食を食べながら言った。香に、

『そんな高いもの頼まないでよ!』

と言ったが、注文してやった。

「それにしても、付き合ってくれる男が他にいないのかよ。」

「いないから、ヒロに頼んだんじゃない。」

「ったく、早く彼氏作れよ。度々、休みの日に付き合わされたんじやたまんねえよ。」

「うるさいわね。ヒロだって早く彼女作りなさいよ。っていうかさ、私じゃダメかな？」

香が、真顔になって言った。

「はっ!？ お前、何言って…」

宏が言うのをさえぎって香は、

「いやさ、お互いにいい年だし、これといった相手がいないなら、そういう関係になってもいいかな？ って思ったの。やっぱダメかな？」

「…いや、ダメじゃないけどさ…」

「じゃあ、いいの？」

「…少し考えさせてくれよ。」

「いいわよ。返事はいつでもいいから。」

香は、ニコツと笑った。

香は、普通に誰が見ても可愛いと思う女だ。正直、今まで男が出来なかったのが、不思議なくらいだ。宏は、カスミと音信不通の今、かなり動揺していた。とにかく、カスミと連絡を取らなければと思っていた。

トラック野郎に恋して…

カスミは、サードシングルのレコーディングをしないといけない時期なのだが、何一つ手につかず全く詞や曲が出来ていなかった。それでも、他の仕事はいつもと変わらないようにこなしていた。しかし、精神的に限界にきていた為、部屋で仕事に向かうための準備をしている時に、倒れてしまった。それを、迎えに来たマネージャーが、救急車を呼んで病院に担ぎ込んだ。カスミは、ふと気が付き言った。

「…ここ、どこ？仕事に行かないと…」

そう言いながら、起き上がりとうとしたカスミをマネージャーが、

「カスミ！いいから寝てなさい！」

「…マネージャー…、でも…」

「いいのよ、カスミ。とりあえず、一週間入院よ。いいわね？」

「えっ!？」

「心配しなくても大丈夫よ。ストレスと過労が重なっただけだから、一週間ゆっくり休めば心配ないって、お医者さんが言ってた。仕事の方は、社長があちこち頭を下げて回ってるわ、今ごろ。」

そう言いながら、マネージャーは薄笑いを浮かべ、首をすくめた。

「そうなんだ…」

言いながら、カスミは窓の外に目をやった。雨が降っていた。

「カスミは、ゆっくりしてればいいのよ。」

「うん…」

こんな時には、特に宏に会いたいと思っていた。そう思い始めると、だんだんと会いたいという気持ちが募り、知らないうちに涙がこぼれていた。

「どうしたの？カスミ…」マネージャーが、心配そうな顔で見た。

「…何でもない…」

「…分かってるわよ。彼に会いたいんでしょ？そうよね、こんな時

には特にね。同じ女だから良く分かるわ、その気持ち。連絡も出来ないから、かなり参ってるのよね、精神的に。」

「多分…」

「私も、何とかしてあげたいけど…」

「いいよ、迷惑になるから…」

「…まあ、今はとにかくゆっくり休んで、元気にならないとね、カスミ。」

「…うん」

マネージャーが剥いてくれたリングを、一切れほうばった。宏は、久し振りに東京へ向かって走っていた。運転中は、いつもエフエムラジオを聞きながら走っている。すると、カスミが入院したというニュースが流れてきて、一瞬慌てた。宏は、何とかしてカスミに会えないかと思っていた。東京に着いて、仕事を終わらせてから、電話帳でカスミの事務所の住所を探しだし、トラックの中で地図を見て場所を確認してから、電車で向かった。事務所の入っているビルの前まで来た時に、車道に黒塗りの高級車が止まり、遠藤が降りて来た。

「上杉さん！？どうして、ここに！？」

「どうして！？じゃないでしょう。分かってるでしょう。カスミは、大丈夫なんですか！？」

「大丈夫ですよ。心配しないでください。それより、別れる気になりましたか？」

「今はそんな事言ってる時じゃないでしょう！？病院は、どこですか？」

「…教えることは、出来ませんね。別れてくれと頼んでいる相手を、会わせられませんよ。」

「…そうですか。じゃあ、マスコミに言って聞き出しますから。じゃあ、また。」

宏は、そう言いながら歩き始めた。後ろで、遠藤が何か言っていたが、いつの間にかマスコミに囲まれていた。宏は、構わず歩いている。

ると、一人の男が走りよって来た。

「上杉さん！上杉さん！待ってください！」走りよって来たのは、カスミの元マネージャーの行夫だったが、宏は面識がなかったため分からなかった。

「何ですか？」

「すみません。カスミのマネージャーをしていた、斎藤といいます。」

「で、何か？」

「病院を教えますので、カスミに会ってやって下さい。何にも無かった様にしていたんですが、明らかにいつものカスミと違っていたので、心配していたんです。」

「…それは、助かりますけど… あなたは、立場的に大丈夫なんですか？」

「そんなこと、言ってられませんから。早くカスミに立ち直って欲しいですし、事務所もこのままでは影響しますのです。〇〇病院の五〇七号室ですので、早く行ってやって下さい。女のマネージャーがいますけど、今日は七時から事務所で会議がありますので、いませんから。それじゃ。」

「あつ、ちよつと…」

宏がまだ何か言おうとする前に、行夫は戻って行った。宏は、いくらマネージャーをしていたとはいえ、今は会社側の人間が簡単に教えるものなのか、不思議に思った。あれこれ考えたが、とにかく行ってみようと思っていた。宏は、行夫から教えて貰った時間を見計らって、病院に向かった。病院の前に何人かのカメラマンがいたが、知らんぷりして正面玄関から入って行った。いくら写真週刊誌にモザイクが入っていたとはいえ、気付かれないか心配だった。病院に入ると、エレベーターで五階に上がった。病室の前まで行き、話し声が聞こえないか、様子を伺いドアをノックした。

「はい。どうぞ。」

中から声がした。カスミの声だ。

「よお！大丈夫か？」

宏は、軽く手を挙げながら入った。

「ヒロお！？えっ？何で？どうして？夢じゃないよね？」

カスミは、突然、宏が現われたので、目を丸くしてビクビクしている。

「カスミちゃんのニュースをラジオで聞いて、心配だったから来た。」

カスミは、ハンベソになっていた。その泣き顔のまま言った。

「私も、ヒロに会いたくて、会いたくて…でも、ヒロに電話も出来ないように監視されてしまっ…」

「そうだったのか…そりゃ酷いな。やっぱり、来て良かったかな。少しは、気が楽になったかな？」

「うん…ビクビクしたけど、スゴく嬉しい。」

カスミは、泣き笑いになっている。

「うん、良かった！」

「ねえ、ヒロお。今夜、ここにいてくれない？時間の許す限りでいいから。」

「えっ？でも、マネージャーは？それに、看護婦さんとかも来るだろうし…」

「大丈夫。マネージャーは、会議や私の仕事の調整とかで、今夜は戻って来ないし、看護婦さんは、滅多に来ない事になってるから、心配ないよ。」

「まあ、それなら大丈夫か。」

宏は、カスミの病室で泊まることにした。カスミは、宏に今まで会えなくて苦しかったこと、仕事のことなんかを色々聞いて欲しかった。

「仕事の方は、次のシングルが出来ていないこと以外は、順調なんだよね。」

「…そうなんだ。」

「うん…でも、あの記事が出てから、仕事で行ったところで、ナン

パされることが多くなった…」

「へえ、モテモテじゃん。」

宏は、苦笑いした。

「バアカ。遊ばれるって分かってて、付き合う女はいないわよ。それに、私にはヒロがいるからさ。」

カスミは、恥ずかしそうに下を向いた。

「そのことなんだけどさ、ホントにオレみたいなおじさんでいいの？別に実業家で、金持ちってわけでもないし、二枚目でもないしさ…」

「そんなこと全然関係ないの。私は、ヒロの人間性が好きなの。年の差は、関係ないよ。後は…」

「後、何？」

カスミは、頬を少し赤らめながら、

「…優しく抱いてくれるところ。」

言って、両手で顔を隠した。

「バカ、こっちが恥ずかしいよ。」

「えへへ。それに、お金のことにしてもヒロは心配しなくてもいいの。」

「とはいってもさ…」

「いいの。」

「ということは、逆玉ってやつ？」

「他の人からみればそうなるかもね。でも、この仕事をしてたら、ヒロのことは全然面倒見れるかもね。今の人気を維持していければだけだね。」

「大丈夫だよ。曲もいいし歌もその辺のアイドルより、全然上手いから。」

「そうかな？」

「そうだって。自信もてよ、カスミちゃん。」

「じゃあ、売れなくなったら、ヒロが貰ってくれる？」

「えっ!？」

「えっ！？じゃないでしょ。どうなのよ、ヒロ。」

「いきなりそんなこと言うから、ビックリするだろ。その時は、もちろん迷わずカスミちゃんを貰うから。」

宏は、笑顔で言った。

「ホントに！？信じていいよね！？」

「ああ、いいよ。オレの方からお願いしたいよ。」

「…良かった。安心した。」

二人は、時間を忘れて話をしていた。カスミは、宏が今、目の前にいて、話が出来る事に幸せを感じていた。宏は、夜が明ける前に病院を出て、仕事に向かった。別れ際、口づけをして。次に会うのはいつになるだろうと宏は思っていた。

トラック野郎に恋して…（前書き）

久しぶりの投稿ですが、読んで下さい。
まだ、続きます m (m

トラック野郎に恋して：

宏がカスミに会いに行ってから一ヶ月が過ぎた。あれから、カスミは順調に仕事をしている様だった。シングルの発売日が決まったらしく、マスコミに取り上げられていた。だが、連絡は一度もないし、写真週刊誌の話が出ることもなかった。宏は、香の店に向かった。そろそろ返事をしないとイケないと思うが、まだ迷っていた。カスミの気持ち、本気なのは良く分かったし、宏も半端な気持ちじゃないのは確かだ。が、しかし、香のことも気になる。気まづくなると思い、しばらく連絡していない。香も宏が、そのうち来ると思っ

て連絡をして来ない。長い付き合いだけに、宏の行動パターンや性格等はお見通しだ。

「いらっしやいませ！」

相変わらずドアを開けると同時に声がする。

「よお、遊び人！元氣か！？」

香が、笑いながら言う。

「誰が遊び人だよ！失礼なヤツだな。」

「どうだかね。」

「知らないヤツが聞いたら本気になるだろ。」

「それもそうね、はい、どーぞ。」

宏は一口飲んでから、

「あのさ、この前の返事なんだけど…」

「けど、何？」

「例えばさ、俺を好きな女の子がいてそれが有名人とかだったら、俺はその子のことを本気になってもいいのかな？」

「何よ、それ。どういふこと？そんな女の子、いたの？」

「うん、まあ…」

「ホントに！？」

香が目丸くして言った。ちょうどさっき五人の客が入って来て、

今はボックス席で店の女の子と騒いでいる。

「香だから言うけど、言うなよ、絶対に!!」

「分かってるわよ、言わないわよ。で、誰なのよ一体？」

「カスミって知ってるだろ？彼女なんだけど…」

「うっそ!?マジで!?信じらんないんだけど…」

香の顔は、ビックリマークだらけだ。

「だから、どうしていいものかと思って…」

「で、私にどうしろって？私、一応ヒロに告ってるんだけど。」

ムツとしている。でも、本気で怒ってはいない。

「それは分かってる。けどさあ、どうしていいか正直分からないんだ。香から言われた時だって、実際嬉しかったし、上手く付き合っているだろうなと思ったよ。お互いを知ってるし。でも、彼女のことにも気になるし…」

「はい、はい、もう少し返事は待っててあげるから、ゆっくり考えて。悩める中年!」

言って、クスツと笑った。

「中年は、ないだろ、香。」

「まあ、結論を出すのは自分だってことぐらいは、ヒロも分かっているでしょ？」

「もちろん、分かってる。」

「それなら、私は別に急がせるつもりはないからさ、ヒロの納得出来た時に返事を聞かせてね。」

「ああ、分かった。」

「もし、私のほうがダメでも今の関係がなくなることはないからさ、安心して。私は、そんなことぐらいじゃ凹まないから。」

香は、はにかむ様に笑った。

「うん。じゃあ、今日のところは帰るわ。」

「あら?もう帰るの?じゃあ、思い切り悩めよ!」

香は、ニコニコしている。宏は香の、ありがとうございましたあ、と言う声を背にしながら店を出た。軽く手を挙げながら。宏は、そ

の後半月考えていたが、結論を出せずにいた。そんな時に、仕事でトラックを走らせて、途中コンビニに入った。すると、スポーツ新聞の見出しが目に入った。

『カスミ！恋人現る！？』

宏は、思わず手に取った。週刊誌にも写真付きで載っていた。宏は、その二つと缶コーヒーを買いトラックに戻った。記事を読んでみると、宏とは違う男に肩を抱かれる様な感じで、写っていた。誰だ？コイツわ？と、思いながらヤキモチを妬いている自分が、情けないと思った。週刊誌には、その男の話が載っていた。

『まあ、彼女は親しい友人の一人ですよ。』

どちらともとれる、あいまいな決まり文句だった。

その頃カスミは、社長の遠藤に呼ばれていた。マネージャーも一緒だった。

「カスミ、またやってくれたな！？」

週刊誌を机の上に置いた。カスミは、手にとると愕然とした。先日、打ち合わせを兼ねて食事をした時のもので、マネージャーも一緒だった事もあり、勧められるままについ飲み過ぎてしまい、酔った時のものだった。マネージャーが、一足遅れて出て来たので、これには写っていない。

「これは、この前の打ち合わせの時の…」

さえぎるように遠藤が、

「わかってる。詳しい事は、マネージャーから聞いた。しかしなあ…」

「何か？」

「記事になってる男のコメントだよ。どちらともとれる言い方をしやがって。そのせいで、マスコミ連中から会見の予定はあるのか聞かれたが、会見するつもりはない。だんまりを決め込むからな。」

「はい…」

カスミは、宏が見ていない事を祈るばかりだった。

宏は、確かめようがなかった。東京の予定が今のところ入っていない

い。あれから、十日程過ぎていた。宏は香の店に行った。女の目から見てどう思ふかを聞くために。

「何、暗い顔してんのよ!? 元氣だせえ、ヒロ!」

「わかって言うか? 香!」

「まあね、心中お察しますって感じかな!？」

「それで、聞きたいんだけどさあ、女の目から見てどう思う?」

「そうねえ…ぶっちゃけ何とも言えないわね。」

「だよなあ…」

「でも、私としたらヒロが振り向いてくれるかなって、少し期待してるけどね、フフフ」

「まあ、それはもうちょっと待っててくれよ。」

「わかってるって。」

笑いながら、香は言った。宏は、歩いて帰りながら思っていた。

《やっぱり、所詮は手の届かない女の子なのかな…まあ、住む世界が違うし、周りにはいい男が山ほどいるからな。無理もないわな、口説き落とそうとする男は、いくらでもいるよなあ…》

そんな事を考えながら、歩いて帰った。

カスミは、仕事先に行く度に声を掛けられることが多くなった。正直、仕事に行くのが嫌になっていた。とにかく、誘いは全て断り宏の事だけを想っていた。たとえ、何ヶ月と音信不通でも…カスミは今まで、ここまで相手の事を一途に想った事がなかった。何故こんなに、一途になるのか自分でもわからなかった。あれから、十日程過ぎていた。宏は香の店に行った。女の目から見てどう思ふかを聞くために。

「何、暗い顔してんのよ!? 元氣だせえ、ヒロ!」

「わかって言うか? 香!」

「まあね、心中お察しますって感じかな!？」

「それで、聞きたいんだけどさあ、女の目から見てどう思う?」

「そうねえ…ぶっちゃけ何とも言えないわね。」

「だよなあ…」

「でも、私としたらヒロが振り向いてくれるかなって、少し期待してるけどね、フフフ」

「まあ、それはもうちょっと待っててくれよ。」

「わかってるって。」

笑いながら、香は言った。宏は、歩いて帰りながら思っていた。

《やっぱり、所詮は手の届かない女の子なのかな…まあ、住む世界が違うし、周りにはいい男が山ほどいるからな。無理もないわな、口説き落とそうとする男は、いくらでもいるよなあ…》

そんな事を考えながら、歩いて帰った。

カスミは、仕事先に行く度に声を掛けられることが多くなった。正直、仕事に行くのが嫌になっていた。とにかく、誘いは全て断り宏の事だけを想っていた。たとえ、何ヶ月と音信不通でも…カスミは今まで、ここまで相手の事を一途に想った事がなかった。何故こんなに、一途になるのか自分でもわからなかった。あれから、十日程過ぎていた。宏は香の店に行った。女の目から見てどう思うかを聞くために。

「何、暗い顔してんのよ！？元気だせえ、ヒロ！」

「わかってて言うか？香！」

「まあね、心中お察しますって感じかな！？」

「それで、聞きたいんだけどさあ、女の目から見てどう思う？」

「そうねえ…ぶっちゃけ何とも言えないわね。」

「だよなあ…」

「でも、私としたらヒロが振り向いてくれるかなって、少し期待してるけどね、フフフ」

「まあ、それはもうちょっと待っててくれよ。」

「わかってるって。」

笑いながら、香は言った。宏は、歩いて帰りながら思っていた。

《やっぱり、所詮は手の届かない女の子なのかな…まあ、住む世界が違うし、周りにはいい男が山ほどいるからな。無理もないわな、口説き落とそうとする男は、いくらでもいるよなあ…》

そんな事を考えながら、歩いて帰った。

カスミは、仕事先に行く度に声を掛けられることが多くなった。正直、仕事に行くのが嫌になっていた。とにかく、誘いは全て断り宏の事だけを想っていた。たとえば、何ヶ月と音信不通でも…カスミは今まで、ここまで相手の事を一途に想った事がなかった。何故こんなに、一途になるのか自分でもわからなかった。

トラック野郎に恋して…（前書き）

カスミ、香と二人に対して揺れ動く宏の気持ち…
どうなる、三人の恋模様…

トラック野郎に恋して：

宏は、香から告白されてから、正直悩んでいた。カスミからの連絡は、途絶えたままだ。カスミに対する気持ちは、変わっていないのだが、連絡が取れないうえに、連絡先も分からない為半分諦めの気持ちも有るのだった。

「ヒロ、少しは元気になった？」

宏は、自分の気持ちに悩みながら、香と喫茶店で向かい合っていた。「まあ、少しはね」

「それで、何？二人で昼間に、喫茶店も新鮮な感じよね。」

ニコツと笑って、辺りを見渡している。

「実はさ、香から言ってくれたこと嬉しかったんだ。それまで、そんな恋愛対象として見てなかったから分からなかったけど、改めて言われて考えてみたら、これが一番いいのかなあ、って思ってた。まあ、俺みたいな男いいなら、ヨロシクな。」

宏は、言ってコーヒーを飲んだ。手には汗をかいていた。さすがに、かなり緊張していた。

「そう…、嬉しい…、ありがと、ヒロ。」

うつむきながら言って、顔を上げた香の目には、涙が少し浮かんでいた。宏は、香に返事をしたのだが、心の中は半々だった。香は、宏の返事を聞いたとき素直に嬉しかった。でも、宏の気持ちが完全に自分に向いていないのも分かっていた。

《相変わらず、優しいヤツ》

とあって、その優しさが嬉しく、つい涙ぐんでしまった。

「おい、泣くことないだろ！？」

「うるさい！泣いて悪いか！？」

「いや、今まで見たことがなかったから…」

「当たり前でしょ、私の涙は高いんだから。」

香は泣き笑いで言った。

「高いつて、いくらだよ!？」

宏も笑いながら言った。二人は、その後夕方近くまで話し込んでいた。

宏は、約二ヶ月振りに東京に行く仕事になった。到着日は、明後日の月曜日だ。帰りの荷物は、火曜日に川崎からだった。一泊しなればならなかった。こういう時間のある仕事だと、カスミのことも考えてしまう。

《今ごろ、何してるんだろう？忙しいみたいだから、忘れてるかもな。》

あれこれ、考えながらハンドルを握っていた。カスミは、マネージャーが変わってからこの数ヶ月、宏に逢うどころか連絡も取れないでいた。

《ヒロに逢いたい：やっぱりヒロのことが好き、失いたくない!》
気持ちには変わらないでいた。年の差も関係なかった。マスコミに取り上げられることが多くなってきて、仕事先で声を掛けられるが、マネージャーと一緒にの打ち合わせ以外は全て断ってきた。

「いつになったら、携帯返してくれるのよ!？」

「社長がいいと言うまで、持たせることは出来ません。」

「全く：、いい加減にして欲しいわ：」

何とかして、このマネージャーの隙を見て、ヒロに連絡を取りたいと思っているのだが、この数ヶ月隙を見せたことがない。

《何とかしないと：》

カスミは、唇を噛んだ。

宏は、順調に国道を走らせていた。時間がある時は、高速道路は走らない。ちょうど、浜松を走らせている。日が暮れようとしていた。ついさっき、香が電話してきた。

「ヒロ、無理したらダメよ、気をつけてね。」

そう言って、電話を切った。

《たまには、可愛げのあることを言うんだな》
と思い苦笑いした。

《このぶんなら、掛川で仮眠出来るな》
そう思いながら走らせていた。すると、電話が鳴った。見ると公衆電話の表示だった。

《誰だろう?》

宏は少し緊張しながら出た。

「もし、もし」

「ヒロ!? わたし。」

電話の主は、カスミだった。

「久しぶり、元気? どうしたの? 携帯は?」

宏は気持ちの高ぶりを押さえながら言った。

「ゴメン…連絡出来なくて…携帯取り上げられて、返してくれないの。マネージャーも女の人が変わって、ずっと見張られてる感じなの。」

カスミは早口で言った。隙を見て掛けているからだろうと思いがら、

「そうだったのかあ。今は大丈夫?」

「うん、社長からの急な呼び出しで事務所に戻ったから。ねえ、ヒロ。いつ東京に来る? ヒロに逢いたい!」

まだ、早口で言ってる。

「明日、東京だよ。」

「そうなんだ!? それで、いつ帰るの?」

「明日は泊まりだから、明後日だけど。」

「やったあ! 明日、休みだからデートしよ。何とかして、出るから。じゃあ、この前の場所に、朝十時に待ち合わせしよ。遅れるなよお、ヒロお」

「ホントに大丈夫なの!? 俺は、すごく嬉しいけど…」

「大丈夫だって! 何とかするから、心配しないでいいよ。」

「でもさあ、一つ間違えば今のカスミの立場が…」

「いいの！私は、ヒロに逢いたいの！！失いたくないの！！」

カスミは、いつしか涙声になっていた。

「そうか、分かった…待ってるから。」

「うん、ありがと。」

そう言って、電話を切った。宏は、正直嬉しかったが、香に返事を
してしまっている。器用に二人と付き合うことは出来ない。

《気持ちに素直になるのか、それとも…》

宏は、また悩むことになった。

トラック野郎に恋して：

宏は、カスミとの約束の場所にいた。時間まで、まだ十分程
《ホントに、来れるのか？》

そう思いながら、待っていた。
時間になったが、カスミはまだ来ない。

《やっぱり、無理だったか！？》

それでも宏は時間があるため、待つだけ待つことにしていた。宏には、この待つ時間は丁度良い考える時間でもあった。

《帰ったら、香とも話をしないと…》

そう考えていた。

カスミは、マネージャーの出掛けた隙に、やつとの思いで抜け出した。休みらしい休みが無かったため、カスミが仮病を使ったら、薬を買いに行行ったのだ。彼女も、カスミがここ数ヶ月おとなしくしていたので油断したのだろう。

《急がなきゃ！》

カスミは、大通りまで走って行きタクシーを拾った。宏との約束の時間を二時間も過ぎている。

《ヒロ！お願い！待ってて！！》

タクシーの中で、祈る様になっていた。近付くにつれ、不安ばかりが募る。時間も、午後一時になろうとしている。タクシーが、埠頭に渡る橋の手前の信号につかまった。

「あっ、ここで降ります！」

カスミは、宏が待っていないかもしれないと思い、手前から歩いて行くことにした。近付くにつれ、カスミは、

《待っていないかったら、どうしよう！？》

と思い、泣き出してしまいそうで、まともに前を向いて歩けない。橋も半ばを過ぎたところで、ようやく顔を上げた。涙目に宏の姿が映った。「ヒロ！！、ヒロ！！」

カスミは、呼びながら小走りになっていた。半ベソをかいていた。「ヒロお！！ずっと、逢いたかった：逢えて、嬉しい：私、ヒロのこと大好き！この先、何があってもヒロとの事大切にする。」

カスミは、言いながら抱きついていた。

「おい、おい、そんなに泣くなよ。俺も逢えて嬉しいから。それより、カスミちゃん。俺、腹ペコだからご飯食べに行こ。」

「あつ、ゴメン：待たせちゃったからね。」

カスミは、涙を拭きながら笑った。

「うん、待ったな。キリンみたいに首が長くなったかな？」

「バカ。寒いよ、そのオヤジギャグ。」

カスミは、そう言いながらも、笑っていた。

二人は、横浜に行った。中華街で食事をした後、〈みなとみらい〉の観覧車に乗っていた。ベイブリッジや山下公園等が一望できる。幸いにも、途中、誰もカスミに気付かなかった。スッピンの上にサングラスをしていた。スッピンでも可愛い。サングラスは、元々宏のだ。

「何から話していいか分からないけど、とりあえず、あの週刊誌の写真はデマだから：」

「：：そうか。」

「ホントよ、信じて。私、ヒロを失いたくない：今はそのことが支えになってるの。たとえ、今日のデート写真が週刊誌に出ても。その時は、はつきり言うわ。」

「：うん、まあ、今のカスミちゃんなら人気が落ちることも無いと思うよ。」

「人気なんてどうでもいいの。歌っていければ、メジャーとかマイナーだとか関係ないの。」

「でも、周りはそうは思っていないだろ！？」

「けど、私は自分の気持ちにウソをついてまで、歌いたくないの。」
「：カスミちゃん。」

「ねえ、ヒロお。明日の朝まで時間があるんだよね？今夜は、付き

合ってくれるんでしょ？」

カスミは、イタズラっぽく笑いながら言った。

「ああ、大丈夫だよ。」

宏も笑顔で答えた。

その後、二人は横浜の街でウィンドウショッピングをしながら歩いた。人目を気にすることもなく。宏は心配だったが、カスミが、

「気付かれても構わないから、行こう！！」

と言ったからだ。その途中でカスミが、

「ねえ、ヒロお。その作業服、何とかして欲しいですけどお」と、言った。

「しょうがないでしょ、私服とか持ってきてないし…」

「そうよねえ、急だったからねえ」

「そうだよ。」

「じゃあ、また私がコーディネートするから買いに行こ。」

「えー、いいよ、いいよ。買うだけのカネ持ってないし…」

「それは、心配いらないの、ヒロ。」

「いや、でも…」

「いいの！ヒロがその格好じゃ、逆に目立つんですけどおー！？」
言いながら、手を取り歩きだした。

一通り、歩いた後二人は品川まで帰った。品川で二人はレストランにいた。

「ヒロ、今日はホントに楽しかった。それに、やっぱりヒロのことが好きなんだって思ったよ。」

言って、照れ笑いになっている。

「そうだね。久し振りで楽しかったよ。カスミちゃんの顔も見られたし。この年で、観覧車に乗るとは思わなかったけど。」

宏も笑った。

「ええー、いいじゃん観覧車ぐらい。年は関係ないって！」

「そうだね。」

「やっぱり、いいよ。その服。」

言いながら、ニコニコしている。

「そうか!? まあ、スタイリストがいいからな。」

「当たり前じゃん。このカスミ様よ。」

笑いながら偉そうにしている。

「ねえ、ヒロ。今日も明日の朝までなら時間あるのよね?」

「うん、寢床はトラックだけだね。」

「そう…だったら…」

カスミはうつむいた。

「…」

二人とも、黙ってしまった。少しの沈黙の後、宏が言った。

「…あのさ、カスミちゃんさえ良ければだけど、泊りに行く?」

宏も、年甲斐もなくドキドキしながら言った。

「うん!! 行くう!!!!」

言いながら上げた顔は、とびきりの笑顔だった。宏のその言葉を待っていたのだった。

二人は、シティホテルに入ってから、色々な話をしていた。というよりは、カスミの方が宏の仕事や仕事先での話を聞いていた。何処に行ったとか、何が美味しかったとか…

「ヒロ。今日のことバレてても、私、平気だからさ。心配しなくて大丈夫だから。」

「…ホントに!?!」

「うん、大丈夫! もし、大丈夫じゃなくなったら、ヒロに貰ってもらうからさ。」

ニコっと笑う。

「大丈夫だよ。マイナスイメージにはならないからさ。」

「私、売りたいとかどうでもいいの。好きな歌を好きなように歌えれば、それでいいんだけど…それで、ヒロの傍にいられたら最高! なんだけどなあ。」

「それは、カスミちゃんの夢?」

「うん、夢。っていうか、現実になりたいんですけどお。」

上目遣いで、宏を見る。時々、妙に色っぽい感じになるなあと、宏は思った。

「じゃあ、もし今日の事で何かあったときに、業界なんていたくない、ヒロの傍にいたいと心の底から思った時には、いつでもおいで、カスミちゃん。その代わり、今と違って苦勞するのは明らかだよ。」

「うん、分かってる。でも、ヒロと一緒にいられて幸せならそれでいいよ。」

「そうか…もしものときは、覚悟してるんだね。」

「あつたり前じゃん。」

少しカスミは、ハニかんだ。

「ホント、今でも夢みたいだよなあ。あの“カスミ”が、今、目の前にそれもベッドの中で横にいるんだからなあ。」

「なあと、別に不思議じゃないよおう。一人の女の子が一人の男の人に出会って恋をして、今があるんだからさあ。」 “カスミ”がいるんじゃないくて、ヒロのことが大好きな女の子が隣にいるんだよ。」

言いながら、宏の方を向き抱きついた。宏は、カスミを離すと口づけをした。そして、数ヶ月振りに二人は結ばれた。それも、お互いの逢えなかった思いが吹き出し、激しく何度も求めあった。

トラック野郎に恋して…（前書き）

またまた、久しぶりの投稿になってしまいました。楽しみにしていた方も、そうじゃない方も、初めて読む方も、お待たせしました。間隔が開かないように、連載投稿しますのでよろしくお願いします。内容も佳境になっています。

トラック野郎に恋して：

宏は、この前と同じ様に先にホテルを出た。カスミに口づけをして。カスミの方も幸せな気分浸っていた。でも、一つだけ違うところがあった。

“ 今回の事が知られて色々と言われるようならもういい。ヒロのそばに行く。ヒロは、生活面を心配してるみたいだけど、それなりの貯えはある。ヒロと一緒にいたい！！”

そう心に決めた事が唯一、この前とは違っていた。カスミは、タクシーを拾いマンションまで帰った。

案の定、マンションには社長の遠藤がいた。カスミが、部屋に入るなり遠藤は言った。

「カスミ！！どこに行ってたんだ！？誰と一緒にだったんだ！？と、まくし立てた。

「どこでもいいでしょ！！ちゃんと帰って来たんだし。」
「当たり前だ！！」

「じゃあ、そんなに怒鳴ることないでしょ！」

「マスコミに、目を付けられているんだぞ！少しは、考えろ！」

「別に構わないわよ。私は、気にしてないから。」

「とにかく！！あまり心配をかけるな！！いいな！？分かったな！？」

「はあい、分かりましたあ！」

カスミの声を背にして、遠藤は帰って行った。とりつくしまもない、半ば呆れ顔で。

カスミは、ミサキに電話した。いつものバーで、カウンターに並んで二人は座っていた。

「何よお、話って？恋の話かなあ？カスミ。」

言いながら、カスミの顔を覗き込む。

「まあね、それもあるけどね……」

「何!？他にも何かあるの?」

「…うん。」

「何よお?」

「昨日さ、久し振りにアノ人に逢ったの。それで決めたの。昨日の事で色々あるようなら、彼のところに行くって。」

「はあ!？何言ってるの!？今のカスミがそんな事出来るわけないじゃない!もう少し、冷静になりなよ!」

「私は、冷静になって考えて決めたの。」

「でもさあ、カスミが行かなくても、彼に来て貰ったらどうなの?」

「もちろん、それも考えたわよ。私がまだマイナーなら、それもいいけどさ。これだけ、売れてきたら逆に彼に迷惑かけてしまうと思うのよ。」

「それは、そうけどさあ…それぐらいは、その人も分かってるでしょ? 有名人を、彼女に持つならさあ。」

「それは、彼も分かっている。でも、私は芸能人のカスミとしてじゃなく、普通の一人の女の子として付き合っているのよ。」

「それも、分かるけどさあ…」

「とにかく、バレたららの話しなだけどね。」

カスミは、苦笑いした。ミサキがイタズラっぽく笑いながら、言った。

「バレるに決まってるじゃん…マスコミに、目、付けられてんのに…」

「やっぱり、すぐバレるかなあ?」

「…はあ。あんたって人は…」

「何よお?」

「…せっかく、売れて来てこれからなのにさ…」

「…正直、売れて来て嬉しいわよ。でも、有名になって来たら、色々不自由になってきたし、何よりも、曲づくりを前みたいに自由に出来ないのよ。私は、有名になる事は、どうでもいい。好きな曲を好きなように、ストリートの時みたいに歌えればいいのよ。」

「…そうかあ。じゃあ、カスミは決めてるんだ。」

「…そうね。」

「…はあ。仕方がないわね。私は、カスミのことを応援するからね。あんたって、結構頑固だからね。」

ミサキが、苦笑いした。カスミもつられて苦笑いした。

「ありがとね。」

「何言ってるの。長い付き合いじゃないの。」

ミサキは、カスミの肩を叩きながら言った。

「そうね…」

「何かあったら、連絡ちょうだいね。」

「うん。」

二人は、カスミの話が終わると、次は、ミサキのグチのメドレーだった。

宏は、東京から帰って仕事が無かったため、出発することではなく、昼過ぎに部屋に帰っていた。

“俺はどうしたら…カスミの気持ちは嬉しい。でも、彼女の可能性を潰していいものか？しかし、カスミがあそこまで決心しているなら、カスミの気持ちに応えるのが…”

宏は、考えていた。香と15時に会う約束をした。

宏と香は、喫茶店に向かい合っていた。

「急にどうしたの？」

「…ん、ああ、実はさあ…」

宏が言い終わらないうちに香が、

「見当は付くわよ。あの娘のことでしょ？何かあったみたいね、ヒロ。」

香は、ニヤツと笑った。

「…バレバレやな。」

宏も苦笑いした。

「当たり前でしょ。長い付き合いなんだから。で、どうしたの？」

「…ん、あのさ…」

宏は、次の言葉が出てこない。

「…あのさ、ヒロ。思ってることは、はっきり言わなきゃダメよ。優しいのは分かるけど、それがヒロの欠点になることもあるのよ。別に、驚かないから。」

「ああ…」

「で、どうしたの？」

言っただけ、カフェオレを一口飲んだ。宏もつられるようにコーヒーを一口飲んだ。

「あのさ、この前、東京行ったときに、あの娘に逢ったんだ。」

「…それで？」

「やっぱり、彼女のことを好きだって分かったから…」

「…だから？」

「だから、ゴメン！！香！！この前の返事は、なかったことにしてくれ！！ホント、ゴメン！！」

宏は、テーブルに両手をついて頭を下げた。香の顔をまともに見れなかったし、本当に悪いことをしたと思ったからだ。

「…全く、ヒロは変わらないわね。そんな事は、初めから分かってたわよ。」

香は、苦笑いした。

「えっ！？」

「えっじゃないわよ。ヒロと何年の付き合いになると思ってたのよ。」

また、香は苦笑いした。

「いや、まあなあ…」

「いいわよ。なかったことにしてあげるわよ。正直、ショックだけど…」

香は寂しそうに笑った。

「…ゴメン！香…」

「…もういいわよ、ヒロ。別に、今までの関係が壊れるわけじゃない」

いから。でも、ヒロのことを片想いしててもいいわよね？」

「ああ、いいよ。」

「相談には、いつでもものるからさ。」

「分かった、ありがとう。」

宏は、うつむいた。ホントに悪かったなあと思っていた。香は、そんな宏を見てまた、苦笑いした。

「それで、彼女は何て言ってるの？」

「また騒ぎになった時には、来るって言ってる。」

「マジで！？芸能界ヤメて！？来てどうするのよ！？」

香の目が点になっている。顔中に、？マークだ

「歌は自分の好きなように歌えればいいから、芸能界には未練はないらしいけどね。」

「へえ…でも、住むところとかはどうするのよ？ヒロと一緒に住むの？」

「…そう言ってたね。」

「そうなんだあ…ヒロ、仕事はどうするのよ？今のままじゃダメでしょ。」

「だよなあ…やっぱりなあ…」

「当然！まあ、今から色々考えてもしようがないんだけどね。」

いつの間にか、香も自分の事のように話している。

「そうだな。その時は、連絡していいかな？」

「当たり前じゃない。いいわよ。」

香は、いつもの笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9580j/>

トラック野郎に恋して…

2011年10月6日19時04分発行